
幽霊少女と領主様

花宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊少女と領主様

【Nコード】

N1989BA

【作者名】

花宮

【あらすじ】

少女が目を覚ますとそこは見知らぬ部屋。そして、鈴花という名前以外何も思い出せなかった。記憶喪失以外にも彼女は自分自身が幽霊になっている事や異世界に居る事に気づき絶望するが唯一鈴花の事が見える青年にとり憑いて幽霊ライフを楽しむ事に。そんな幽霊少女と青年領主とのお話です。

視界がふわふわと白く淡く光り意識が目覚める。

少女が目覚めて視界に入ったのは、これまで少女が育った部屋よりも広い寝室だった。

その寝室には、天蓋付きのベッドが右側の壁に付けられて置かれている。サイドテーブルには透明なガラスで作られた水差しとシンプルなコップが銀製のお盆に備えられていた。

お盆の横には、小箱が開けられたまま置いてあり中にある指輪が丸見えになっている。

少女は見慣れない部屋に驚き、顔をキョロキョロと動かして目につく情報を頭の中に取り込むがやはりこの場所は初めて見る部屋だった。

「どこ何処？」

誰も居ない部屋は当たり前前に少女の疑問に答える人は居らず、言葉は小さなつぶやきとなって部屋に消えてゆく。

目覚めてから立ち尽くし続けていた事に気付いた少女はだんだんと鼓動が強くなる心臓を落ち着けようと、ふかふかな絨毯に座りこ

む。

その座りこみ方は、腰が抜けたような座り方だった。

少女は座り込むと両手を絨毯に付き俯いて、今日1日の出来事を思い出そうとしたが、鈴花という名前以外の事を思い出す事ができなかった。

自分自身に起こった出来事さえも思い出せない事に焦りを覚える。

「…何で？何で何も思い出せないの？」

眩いたと同時に、鈴花の黒い瞳から、涙がじわじわと溢れでてくる。

どうして私は此处にいるの？

何も思い出せないのはどうして？

どうしてなの！？

記憶が思い出せない事にショックをうけ、ここが何処なのか確認する事すら忘れて、涙を流し続けた。

嗚咽で揺れる肩から肩より少し長い黒い髪が一房胸に落ちる。

俯いて泣いているため、瞳から溢れた涙は頬をつたい、絨毯に落ちてゆくが涙は絨毯を濡らす事はなく、消えていった。

その異様な光景に気付く事なく暫くすると泣き止んだ鈴花は涙こそではないものの、眉尻は下がったままだった。

部屋の中はカーテンが閉められているが、カーテンの隙間からの光によって部屋はうっすらと明るみがあり、その明るみを見る事で鈴花は落ち着く事ができた。

改めて見た部屋はやっぱり広く棚やテーブル、椅子などの家具には細やかな装飾がされていた。

この部屋の主はお金持ちなんだろうなと思ったのが鈴花の正直な感想だった。

これからどうするべきか考える。
まず、状況が知りたかった。ここに何時までもたたずむ訳にはいかない。

「やっぱり部屋の外に出なきゃ始まらない！」

そう思い、ドアに近づきドアノブを回そうと手を伸ばしたがドアノブはガチャリと音を立て先に開いたのだった。

内側に開くドアを避けるため、鈴花は慌て左側に移動をする。

この部屋の主かもしれないと考え、緊張しながらも中に入ってきて来る人を待った。

入って来たのは青年で鈴花よりも背が高く、ブロンドの髪は緩いウェーブが肩に掛かるほどの長さがある。鈴花からは横顔しか見れないが鼻筋もスツと伸びていて、顔立ちは整っている事が分かった。背が高いために鈴花は青年を見上げる形になった。

青年は鈴花の横を通りすぎ、部屋の奥へと進んで行く。透き通った空のような瞳は鈴花を捉える事はなく、真っ直ぐと部屋の奥にある本棚へと向けられていた。

私よりも背が高いから気付かなかったのだろうか？不思議に思いながらも、声をかけようと近づく。

青年は鈴花に気づく事なく、本棚から目的の本を直ぐに見つけたように本を手にとっていた。

「あつ、あの…すみません」

本の表紙を開く青年に鈴花は声をかけるが、青年は気付く様子もなく本を読み始めた。

声が思っていたよりも小さかったのかもしれないと思い鈴花は青年の背後まで近づき、先ほどよりも大きな声で話しかける。

「あの、すみません！」

鈴花は青年の背後に立っており後2歩程で彼に触れられるほどの近さに居るため青年には鈴花の声がはっきりと聞こえるはずだが、青年は未だに本を読んでいる。

鈴花は先ほど落ち着いた不安な気持ちがまた暴れ始めるのをわざと気づかないように、さらに大きな声をだした。

「すみません！」

その声は少し震えてはいるものの部屋に響く程の声の大きさだった。が彼には鈴花の声が聞こえてはおらず瞳は文字を辿るばかりだった。

もしかしたら、この人は耳が聞こえないのかもしれないと鈴花は青年の肩を叩こうと右手を伸ばしかけたが、青年は本に目を落としたまま振り向き直つ直ぐと鈴花の方へと歩きだす。

鈴花は伸ばしていた手がぶつかりそうになるのを避けるため腕を慌て引つ込めようとしたが間に合わずに指先が青年に触れそうになる。彼は今だに気付くことはなくぶつかってしまふと思つた鈴花は目を瞑りやがてやって来る衝撃に備えた。

しかし衝撃は中々こず、代わりに暖かい風が通り過ぎるのを感じ不

思議に思った鈴花は恐る恐る目を開けた。すると、目の前に居たはずの青年がそこには居らずその事に驚いた鈴花は慌てて後ろを振り向く。

鈴花は不安な気持ちがますます心の中で存在をましてゆくのを嫌でも感じていた。

後ろを振り向くと青年は本を片手に持ちバルコニーに出ようとドアを開けている。

青年がドアを開ける事で部屋に外からの風が入り純白のレースカーテンがふわりとはためく。薄暗い部屋により一層と明るい光が外から溢れてくる。

その光とレースカーテンの方に向かって青年はゆっくりと歩いて行く姿が見えた。

外光によって、青年の背は暗くなっているが鈴花にはその背が何故か尊く見え不安は一瞬だけ忘れていた。

鈴花が彼の背を見つめている間にその姿はレースカーテンのはためきの中に消えて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1989ba/>

幽霊少女と領主様

2012年1月12日23時58分発行